

(2)
(1)

0098

RA'-0178

0168

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

昭和二十六年六月二十八日
調二資料第二四九号

アメリカ上院軍事外交合同委員会における証言(その一)
— マッカーサー元帥の証言 —

調査局第二課

0099

目次

はしがき	一頁
マ元帥解任の経緯	二頁
マ元帥と統合参謀本部	四頁
マ元帥と米の極東政策	五頁
マ元帥と米軍軍一般	七頁
マ元帥と朝鮮戦局	九頁
マ元帥と台湾(含国民政府)問題	一二頁
マ元帥と中共関係	一四頁
マ元帥と対ソ関係	一五頁
マ元帥と国連	一七頁
マ元帥と対日関係	一八頁

0100

RA'-0178

0169

は
し
か
き

四月十一日突如解任されたマッカーサー元帥は同十六日飛行機で日本を出発帰国し、十九日には上下両院合同本会議において自己の見解を明らかにする演説を行つたが、上院においてはマ元帥の罷免をめぐる事情を調査することに決定し、上院国軍、外交合同委員会は五月三日よりその調査に乗出した。マ元帥は石委員会の最初の証人として五月三日より三日間にわたり、十七万四千語をつくしてその解任をめぐる歴史的証言を行つた。

本稿はニューヨーク・タイムス紙により、マ元帥証言全文をダイゼストし、その主要点についてマ元帥使用の言葉をそのまま邦訳し、もつて当時の事情を明らかにするとともに執務参考に供せんとして編輯したものである。

昭和二十六年六月二十四日

調查局第二課長

1

マ元帥解任の経緯
大統領が軍人の補職又は転補を行う権限は絶対的のものである、従つて自分は召喚されたことに對し、その権限を疑つたことは全然ない。

米國軍隊で前例のない突然の解任命令を受取つた結果、當時手をつけていた指令を遂行する時間的余裕がなかつた。然しそれが米國の利益を危険にさせたとは考えない。

自分の解任命令中にあつた唯一の理由は、自分が米國と國連の政策に對し、完全な援助を與えることができないと思われたといふのであつた。自分はその政策が何んであるかを通知されていなかつたし、現在でも知らないのであるから、自分がその政策に反對したとは到底云えない筈である。

自分の言動が命令不服従の罪に問われるかも知れないという注意を受けたことは一度もない、又自分はそれに近い道を歩いてゐたとは気が付かなかつた。自分が中共の軍司令官にあてた停戦協定打合の通牒の言葉使いが、召喚の理由となつたかどうかが、自分は知らない、然し軍司令官が敵軍司令官と休戦について交渉する伝統的権限が、いかなる方面においても問題化されるとは信じられない。この通牒を出す少し前に、大統領が近く発表するメッセージを準備中だという通知は受取つた、然し自分の声明は純然たる現地の軍事的評價に基づいて行われたもので、これとは何の關係もないことである。自分はこれ迄二回同

0102

0101

様な声明を出している。三月二十四日付の声明の内には、何等
異例な筋をはづれたある。三月二十四日付の声明の内には、何等
当惑させようとする様な考へは毛頭なかつた。勿論大統領を
解任命令に付いて考へられる唯一の点は、政府は自分の意見
を知つてゐるものであるから、近い将来これと反対の行動をとる
ために行われたものであると思ふ。指令が無いといふことを
当局は政府に對して指令を仰いだ。中国に爆撃を行うことに
より、朝鮮戦局を拡大させるかどうかと、中国に爆撃を行うことに
分の進言と統合参謀本部の進言が、政府にいつて実施されな
つたことから見ると、自分と政府との間に、この点にいつて意
見の相違があつたといわれても、それは全く筋の通つた推論と
云わざるを得ない。これを署名し、朝鮮戦局の終末をつけるのが
自分の使命であり、これを完結したいと希望し、その上で現役
を退く意向であつた。

0103

マ元帥と統合参謀本部
一九五一年一月十二日統合参謀本部は、国防省に次の進言を
行つた。自分は當時も、將又現在もその意見に全く同感である。
(一) 中共との通商に對する経済封鎖をつづけ且つこれを直ちに
強化する。
(二) 中共の海上封鎖実施の用意を行い且つわが方の朝鮮におけ
る立場が一段落し、或は撤退と同時に且つその時の情勢如何によ
り、これを實施する。
(三) 直ちに中共沿岸地域並びに満洲の空中偵察に對する制限を
撤廢する。
(四) 直ちに中国国民軍の作戰に對する制限を撤廢し、共產党に
對し有效な作戰を行えるよう田氏政府軍へ用兵上の援助を與え
る。
以上四項目を実施すれば、この戦争を最も速やかに且つ最少
の犠牲において終らすことができると思つてゐる。

0104

RA'-0178

0171

マ元帥と米の極東外交政策について自分の意見を徴した。そこで自分
 分は任務の關係上直接國策について出席した。一九四七年
 下院外交委員會の對直轄國策について出席した。一九四七年
 い極東問題を如何に取扱ふかという受けたことは、ない。公式に自
 分の意見が如何に強かたに全くなかった。このことは、米國が太
 平洋で過去百年間にわたる内政的失策である。米國が太
 共と国民党を合併するに當つたのは、水と油の混合である。時に
 し、米國の全戦場の上で最大の敵は、共產主義である。これを破
 ては世界の如何なる戦争も、それは、共產主義の破壊である。破
 け、自分らは朝鮮戦争の犠牲者も、これを見終つて、信じてゐる。
 對政府は、高麗戦争の犠牲者も、これを見終つて、信じてゐる。
 け、自分らは朝鮮戦争の犠牲者も、これを見終つて、信じてゐる。
 討論は、台端を中共に引き渡す等朝鮮戦争の正しき解決、正議に基
 或は、台端を中共に引き渡す等朝鮮戦争の正しき解決、正議に基

く且つ公平な解決に直接關係のない問題を取上げてはならない
 と、自分の太平洋では、アリューシャンからマリアナに至る一連
 の諸島基地を保持するといふ一般戦略政策を持つてゐる。これ
 には政府当局も完全に同意してゐると思ふ。

マ元帥と中共関係
 中から敵機を追撃して、三〇〇一八〇〇機と推定した。米空軍は最初
 思つたが、これは禁止せられた。中から敵機を追撃して、三〇〇一八〇〇機と推定した。米空軍は最初
 分は台湾の国民党政府軍を利用して、文書で申し入れた。満洲の自
 中基地爆撃と、中共沿岸封鎖について、コリンズ陸軍参謀総
 長来訪の時打合せをしたが、沿岸封鎖を文書で申し入れたかどうか記
 憶せぬ。自分には中国本土を米陸軍をもつて攻撃することを提唱
 したことは絶対にない。反撃手段に非常な制限を加えられてい
 て、米軍は中共軍に對する。自分の言いたいは、中共を嫌
 が、真の戦争を行つていない。自分の言いたいは、中共を嫌
 を、心でも思ひ止らう。自分の言いたいは、中共を嫌
 と中共は朝鮮戦争に全力を投入し、連合軍を潰滅させ、全朝鮮
 の完全な占領を企図して、力を投入し、連合軍を潰滅させ、全朝鮮
 共の沿岸全部の封鎖を提唱するものである。

は思わない、軍事的以外の方法でその占領に努力している。
 台湾の処分は日本との講和条件の欠くべからざる一部分であつ
 て、その時措置されるべきものである。
 政府の台湾政策には変更があつた。だが、統合参謀本部と
 自分との間に異なる限り、台湾はこれを保持し、敵の掌中に陥
 ることを許してはならない。台湾はこれを保持し、敵の掌中に陥
 かつた。

撃軍防下
も力禦傘万
「米軍」で部一
に持つる。除ソ連軍が中
に勝つてソ連は、共側
ことは極東を参加し、
は思わぬ米軍の補給路を遮断し、
できない。ソ連が極東で行う如何なる攻

在の仮てに成一をなのよかのソリアか統マ
勢は定いおソ功つ左いりソの援ソアを朝きソ元
力空しるけ連をは右。唱も連の助にで決鮮は連帥
と軍てもはソしめ連る軍す造の「は相とはと対
比較よ「信連てが最的朝鮮か北つ当しは極
する援連の威「る在の大略作大知え鮮とアな東ソ
と「で援。に共否方なの上戦の基的。將に共い大因で全
「はあ助仮関か法力見結果で左「は飛や対確模のなことが、
んのが極めソと考敗北と図の相説明で戦争を起しても、
端これ制限されたと「朝鮮戦争の起るや、ソ連をして米国の不足に悩み、
敷にソたも中共戦争に他の方面
すはソの西欧に「対するも

は直ちに全保障を地上軍隊に編成替をする。これは当然のことである。日本は現状では、他の国々が、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、然し、他の国々が、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、無條約の無期限の中に、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、和米國が、無期限の中に、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、不可能な土地。米國は、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、きる。米國は、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、とれる。米國は、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、收めよう。米國は、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、いり出す。米國は、日本に近代的な地上軍隊を必要とする。日本は、

0119